

2019年度しあわせ研究

奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究 III

—背面銘文刻の書と成立過程
及びその後の影響について—

研究員 廣瀬裕之、漆原徹
遠藤祐介



薬師寺境内にて▲

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記3人の共同研究の成果発表であり、「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し、書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきた第3回目の研究論文である。2017年度は薬師寺佛足石「正面銘文刻」、2018年度は同「左側面銘文刻」の調査研究を行い、それぞれ『武蔵野教育学論集』第4号・第6号に研究論文として発表してきたが、2019年度の「背面銘文」の研究は、引き続き精拓本と、原刻写真による照合調査から書線の確認・検討を行い、銘刻文字の書としての復元および判りやすい訳と、その背景の研究を試みた。お蔭様で薬師寺佛足石の3側面に存在する3つの長文銘刻の研究は、今回で完成できた。

古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であった。しかし中世の佛足石が京都法然院、安土城、大阪泉南市林昌寺の3か所で確認でき、また中世の

可能性が高い粉河寺のものも確認することができたことが今回の調査の成果である。薬師寺佛足石の銘文について記した3回にわたる本研究は、従来の研究蓄積を大きく前進させることに成功し、研究史の上に確かな地歩を築いたといえよう。また中世佛足石の存在とその特徴の確認は、佛足石研究において、今後空白とみられていた中世佛足石の発見に資することができるようになった点で大きな成果といえるだろう。3年間にわたり薬師寺の国宝佛足石銘文の調査研究を行ってきたが、この研究には、埴和本精拓本の存在が欠かせない。金木和子先生に深く感謝申し上げたい。また、薬師寺から特別許可を頂き、第2回目の研究では、閉門後の夜の大講堂内でじっくりと銘文を拝見しつつ調査させていただけたことも望外の幸せであった。奈良時代の薬師寺佛足石銘文の書は、書道史上ではあまり知られていない存在であったが、復元してみると中国六朝時代の書の影響が強い優れたものであることが判った。この書美を忠実に再現することができたことが大きな成果と言える。本成果は、『武蔵野教育学論集』第8号（2020年3月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行）に掲載。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていきたい。